



慢性C型肝炎の特徴

慢性C型肝炎とは、前回記載した慢性B型肝炎と同様に、肝炎を引き起こすウイルス(C型肝炎ウイルス・HCV)の感染によって、6ヶ月以上にわたって肝臓

の炎症状態が続き、肝臓の働きが悪くなる病気です。日本における慢性肝炎の原因として、最多となっています。初期症状はほとんどありませんが、治療せず放置しておくと、長い経過のうちに肝硬変や肝がんに進行しやすいうことが知られています。

HCVの感染経路は血液感染です。そのため、空気感染や経口感染の心配はありません。感染の有無は、

慢性B型肝炎と同様に、採血でHCVの存在を確認することで診断します。無料で検診もできますので、自治体や保健所、病院にご相談ください。

現在日本には100人に1人から2人の割合で、慢性C

型肝炎の患者さん、あるいは自覚症状のないHCVの持続感染者(キャリア)がいると推測されており、"21世紀の国民病"とまでいわれています。

慢性C型肝炎の患者さんは、貧血などの血液の異常、うつ症状・不眠など、精神症状といった副作用が現れるケースがありました。

しかし現在では、インターフェロンを使わない飲み薬だけでの治療が普及しています。副作用が少ないため、高齢や合併症のためにインターフェロンが使えなかつた方でも治療を受けられるようになりました。ま

慢性C型肝炎の治療法と

して、今まででは注射薬であ

るインターフェロンを用いた治療が中心でしたが、投与後の発熱・筋肉痛・関節痛・全身の倦怠感といった症状といつた治療を行うか、助成の適応であるか、かかりつけの先生と相談してください。治療や、より詳しい検査を希望される場合は、岩手医科大学付属病院肝臓内科に紹介状をお持ちいただければ行なうことが可能です。

岩手医科大学は2017年創立120周年を迎えます



誠のあゆみ、未来へつなぐ

岩手医科大学